

令和三年度鞠智城跡「特別研究」論文集

鞠智城と 古代社会

— 第十号 —

熊本県教育委員会

序 文

国史跡鞠智城跡は、七世紀後半に唐・新羅による国土侵攻に備えて、西日本各地に築かれた古代山城の一つで、熊本県を代表する重要遺跡です。熊本県教育委員会では、その重要性から、平成二三年度に刊行した鞠智城跡の総合報告書『鞠智城跡Ⅱ』における成果を踏まえ、鞠智城跡の研究を進展させる取組を実施してきました。

その取組の一つとして、平成二四年度から、鞠智城跡に関する研究の深化・蓄積と、鞠智城跡に関連する分野に携わる若手研究者を広く支援することを目的とする鞠智城跡「特別研究」事業を行ってまいります。この論文集は、令和三年度における事業成果を取りまとめたもので、今年度の一般公募で選ばれた四名の若手研究者がこの一年間で取り組んだ研究の成果を収めています。この論文集が、鞠智城跡、ひいては古代山城の研究を更に進展させるとともに、その歴史的価値を一層明らかにする一助となれば幸いです。

最後になりますが、鞠智城跡「特別研究」事業の実施に当たり、御理解と御協力をいただいた各研究者並びに先生方に対し深く感謝申し上げます。

令和四年三月二十日

熊本県教育長 古閑 陽一

目次

序文

例言

論文

出土土器からみた平安時代肥後国内における鞠智城の位置付け……………岡田 有矢 1

地域社会からみた鞠智城―八世紀から十世紀を中心に―……………垣中 健志 25

古代九州北部における馬匹生産の展開と鞠智城……………河野 保博 45

韓国の古代山城の集水施設からみた鞠智城の研究課題……………全 赫基 79

例言

一 本書は、熊本県教育委員会が実施した令和三年度鞠智城跡「特別研究」事業（以下、「本事業」という。）の成果として刊行する論文集である。

二 本事業は、平成二四年三月に刊行した『鞠智城跡Ⅱ―第8～32次調査報告―』で得られた新たな学術的成果を踏まえ、今後、熊本県教育委員会の文化財専門職員のみならず、外部の研究者による鞠智城跡に関する研究も進めていくとともに、若手の研究者を支援し、鞠智城跡を研究する人材を育成することを目的として実施した事業である。

三 本事業では、令和三年四月から一般公募を実施。同年七月に審査を行い、研究助成対象者を決定した。研究期間は、対象者決定後から令和四年一月までの約七ヶ月間である。本書には、研究期間の終了時に研究助成の成果として提出された各研究助成対象者の論文を所収している。なお、令和三年度の研究助成対象者は次の四名である。

岡田 有矢（熊本市文化財課文化財専門職）

垣中 健志（奈良文化財研究所研究員）

河野 保博（立教大学文学部兼任講師）

全 赫基（國原文化財研究院研究員）

五十音順、敬称略

四 本書の編集は、熊本県教育委員会が行った。

出土土器からみた平安時代肥後国内における鞠智城の位置付け

岡田 有矢

対外的な情勢の中で築造されたと考えられる鞠智城は、平安時代頃になると、その機能は不動倉を有する備蓄庫のようなものへ変化したといわれている。こうした変化は、『日本文徳天皇実録』天安二年（八五八年）六月条にみえる「菊地城院の兵庫自ら鳴る、不動倉十一棟が火災にあう」との記載や、当該時期には礎石建物が大型化するという発掘調査の成果から想定されている。

そうした変化を遂げたとされる鞠智城は、その機能の変化故に、管理体制の変化があったのではと考える見解がある。文献史の見解では、大宰府や肥後国が管理したとする説や、重層的な管理体制であったとする説がある。このような説に関して考古学的視点から言及したものは少ない。したがって、今回は機能を変化させたとされる鞠智城の特徴を考古学的に解明することを最終目標にした。

具体的には、鞠智城・二本木遺跡群・上鶴頭遺跡・赤星石道遺跡といった当該期における県内の主要遺跡から出土した一括性の高い遺構出土土器総数（破片数）をカウントし、それぞれの土器組成の傾向を出して比較し、肥後国内の他遺跡と比較することで特徴を見出す。

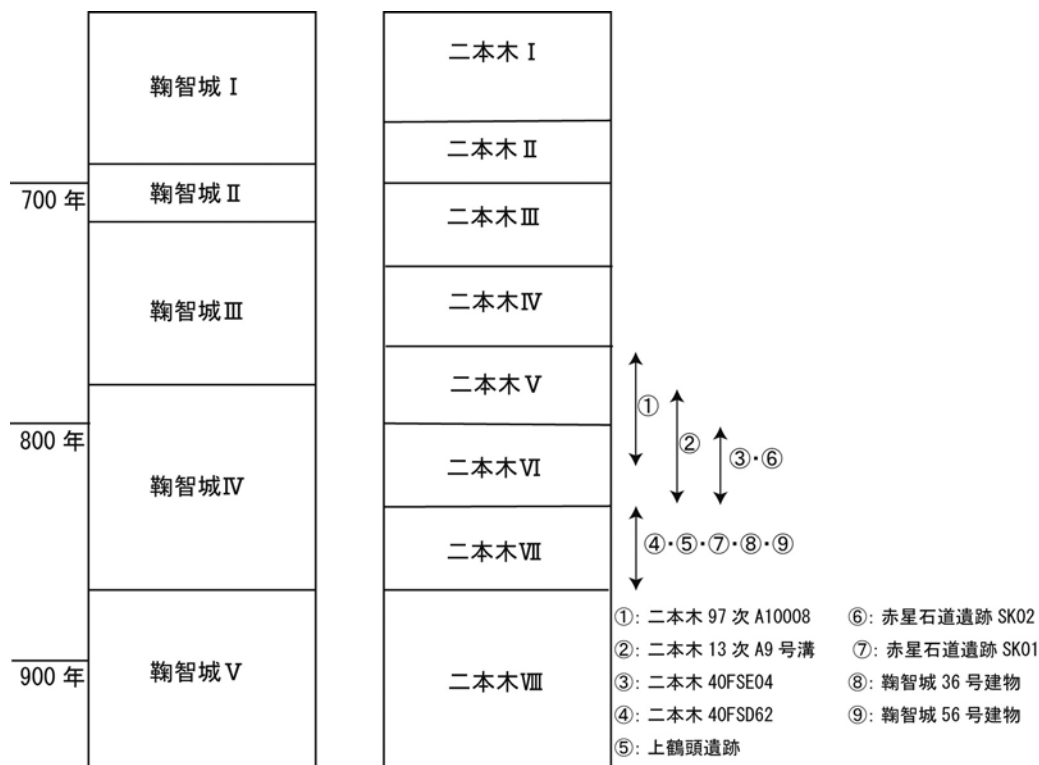
その結果、鞠智城には官衛的要素の強い「回転ヘラミガキ調整土師器」はほとんど出土せず、国府と推定される二本木遺跡群では高い出土傾向にあることがわかった。また、鞠智城と赤星石道遺跡は「土師器坏＋土師器高台付坏」という組成が主であるのに対し、二本木遺跡群は「土師器坏＋須恵器高台付坏」、上鶴頭遺跡は「土師器坏」が組成の主と違いがあることも判明した。これは須恵器供給の優位性があると思われる、同郡に存在する鞠智城と赤星石道遺跡が同様の土器組成になったのは大変興味深い結果となった。

以上のことから、鞠智城の土器組成は極めて在地的であり、大宰府や肥後国が直接的管理をしていたとは考えにくく、鞠智城の管理は菊池郡等周辺の地域が担っていた可能性を提示した。

出土土器からみた平安時代肥後国内における鞠智城の位置付け

はじめに

古代山城である鞠智城は、白村江の戦い後の対外情勢により築造されたと考えられ、築造当初は太宰府の後方基地等の軍事的役割が主であったと考えられている。その後、対外情勢の変化によって、その役割を変えていったとする説があり、平安時代初期頃には備蓄庫のような機能へ変化したものと考えられている。こういった変化には、鞠智城の管理機関や管理体制について文献史的観点からの研究があり、肥後国もしくは郡で管理していたとする説がある（註一）。その一方、鞠智城の考古学的な研究は、遺構を中心とする議論が多く、遺物に関する議論は少ない。特に、年代決定の根幹となる土器に関する議論は低調である。今回は鞠智城出土土器と肥後国内の同時期の出土土器組成を比較し、各遺跡の特徴を見出し、文献史研究で指摘される説を考古学的に立証できるかを最終目的とする。具体的には、主に土器を中心とする遺物組成を、鞠智城、二本木遺跡群、上鶴頭遺跡、赤星石道遺跡とで比較をする。二本木遺跡群は肥後国府推定遺跡であること、上鶴頭遺跡は郡衙推定遺跡であること、赤星石道遺跡は、「山門郷」推定遺跡であることから選定した。



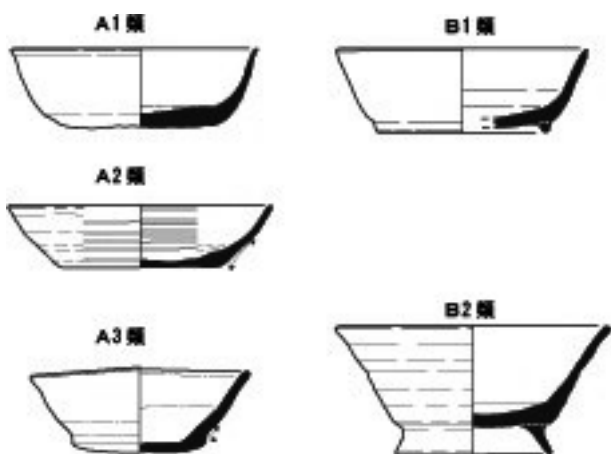
第1図 編年比較図

岡田 有矢

分析方法

今回は主に時期幅が小さい遺構の遺物破片数を型式別にカウントし、組成を比べる。二本木遺跡群では九七次井戸A一〇〇〇八、四〇次F区のSE〇四、SD六二、十三次A九号溝とする。上鶴頭遺跡の出土遺物は、遺物の年代がかなり限られるため、出土遺物全てを対象とした。鞠智城は遺構からの出土遺物が少なく、時期の限定された遺物包含層も存在しないことから、「鞠智城Ⅳ期」に相当する土器をカウントしていく。赤星石道遺跡はSK〇一、SK〇二出土土器をカウントした。

なお、今回の土師器・須恵器の型式分類と年代観は、山元瞭平（山元二〇一九）と筆者（岡田二〇二二）が以前提唱したものに基づく。この年代観では、「鞠智城Ⅳ期」はおおよそ「二本木Ⅴ期～Ⅶ期」にあたる。「二本木Ⅴ期」



第2図 土師器杯分類図（岡田 二〇二一）

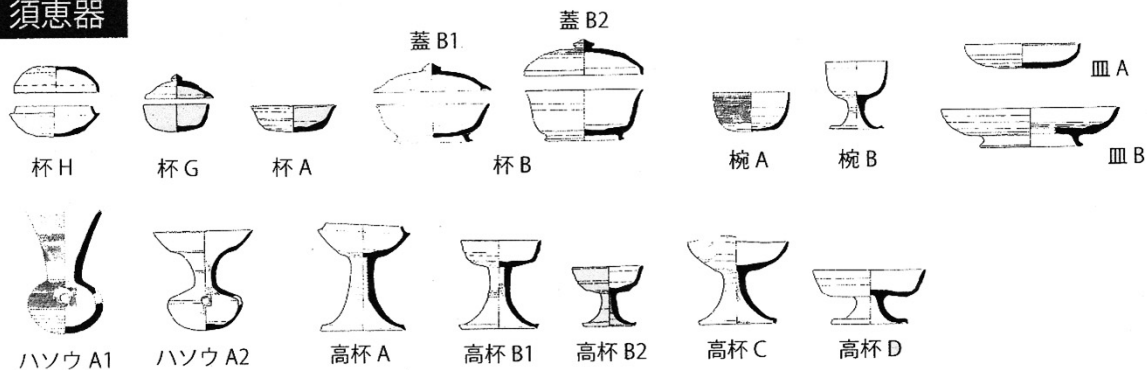
対象遺跡

これは一律に適用する。二本木遺跡群内で提唱した土器編年であるが、今回はこれを一律に適用する。

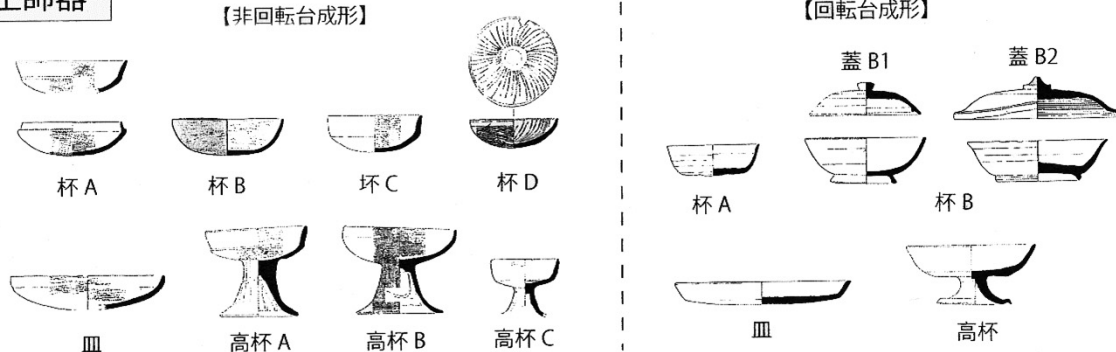
（一）二本木遺跡群

二本木遺跡群は熊本県熊

須恵器



土師器



第3図 山元土器分類図（山元 二〇一九より転載）

第 1 表 二本木編年根拠となる遺物消失表

[illegible]

本市西区にあり、熊本駅周辺に展開する遺跡である。東を白川に、西を花岡山、万日山に囲われ、白川の自然堤防上に遺跡は形成される。弥生時代～江戸時代の複合遺跡であり、諸説あるが、奈良・平安時代や鎌倉時代以降の国府が置かれた地とされている。奈良・平安時代の国府が置かれた確証はないものの、十三次調査で検出された八間×八間の大型建物等、官衙が存在することは間違いないと思われる。二本木遺跡群における官衙域は現在の白川と坪井川に挟まれた範囲と推定されており、その周囲は生活域と推定されている。今回、調査対象にした十三次調査区は官衙域に、四〇次・九七次は生活域に位置する。

十三次調査は放送局建設に伴う調査であり、前述した八間×八間の大型建物等の官衙と思しき遺構や遺物が確認されている。熊本市の見解では、国府とはいい切れないものの、この大型建物に並ぶ規

模のものが他に見当たらないため、託麻国府の可能性があるとされている神水遺跡第一次調査検出官衙建物 $\leq$ 二本木遺跡群第十三次調査大型建物としている。今回、分析対象とするA九号溝はその大型建物より後出する遺構で、幅1m前後、検出された長さは20mを超え、溝の方向はほぼ東西方向である。筆者の編年観に照らし合わせると「二本木V」・「二本木VI」に相当する時期であり、鞠智城変遷の「鞠智城IV期」に相当する。

四〇次調査は熊本駅西側区画整理事業に伴う調査で、F区は現在の新幹線高架から西側約40mに位置する。主な検出遺構は掘立柱建物や竪穴住居、井戸等である。今回対象とする井戸SE〇四と溝SD六二は、それぞれ筆者の年代観でいうところの「二本木VI」と「二本木VII」にあたり、鞠智城変遷の「鞠智城IV期」に相当する。

九七次調査は平成三十年度に行われた、駅ビル建設に伴う調査である。主な検出遺構は、近世の道路（高橋往還）や奈良・平安時代
の掘立柱建物や竪穴住居である。今回対象とする井戸A一〇〇〇八
は筆者の年代観でいう「二本木Ⅴ～二本木Ⅵ」であり、鞠智城変遷
の「鞠智城Ⅳ期」に相当する。

(二) 上鶴頭遺跡

上鶴頭遺跡は七城町（現・菊池市）亀尾字上鶴頭に所在する遺跡であり、いわゆる熊本平野北側の台地上に位置し、眼下には肥沃な菊鹿盆地が広がり、その北側には鞠智城がある。

昭和五十七年に圃場整備事業に伴う発掘調査が実施されており、廂付建物を含む掘立柱建物十七棟が確認された。また、これら建物は「コ」または「ロ」の字状に配置しており、墨書土器が多く出土したことから山本郡衙か、と推測されているが、工藤敬一は報告書

付論にて、「合志郡西部の発展により設けられ、貞觀元年（八五九）五月、合志郡の西部を分けて山本郡を置いたことに伴い廃棄されるにいたった、一時的におかれた官衙跡」と推測している。今回はこの調査時に出土した遺物全てを対象とした。

（三）赤星石道遺跡

赤星石道遺跡は菊池市赤星に所在する遺跡であり、平成三十年に、国道改線工事に伴って発掘調査が行われた。この調査では、十棟の掘立柱建物や土坑、溝等が確認され、越州窯青磁や緑釉陶器、その他出土遺物から九世紀代を中心とする遺跡であると考えられている。また、菊池市赤星には、過去に九世紀の遺跡である赤星福土・水溜遺跡が確認されており、その遺跡においても掘立柱建物や方形土坑、越州窯青磁等が確認されている。このことから、これらの遺跡は一連のものと考えられる。

平成三十年の赤星石道遺跡の調査では、「依麻□」と人名が書かれた墨書土器、土師器耳皿といったあまり見ない遺物が出土している。報告書では、「古代律令制下、郡の下行政区分である「郷」を彷彿とさせる様相を呈する遺跡群」とし、赤星石道遺跡はその中心と推測している。また、菊池郡の九郷のうち、比定地候補の無い「山門郷」の候補地とも推測している。

今回は、赤星石道遺跡の出土遺物の大半を占めるSK〇一、SK〇二出土遺物を対象とした。

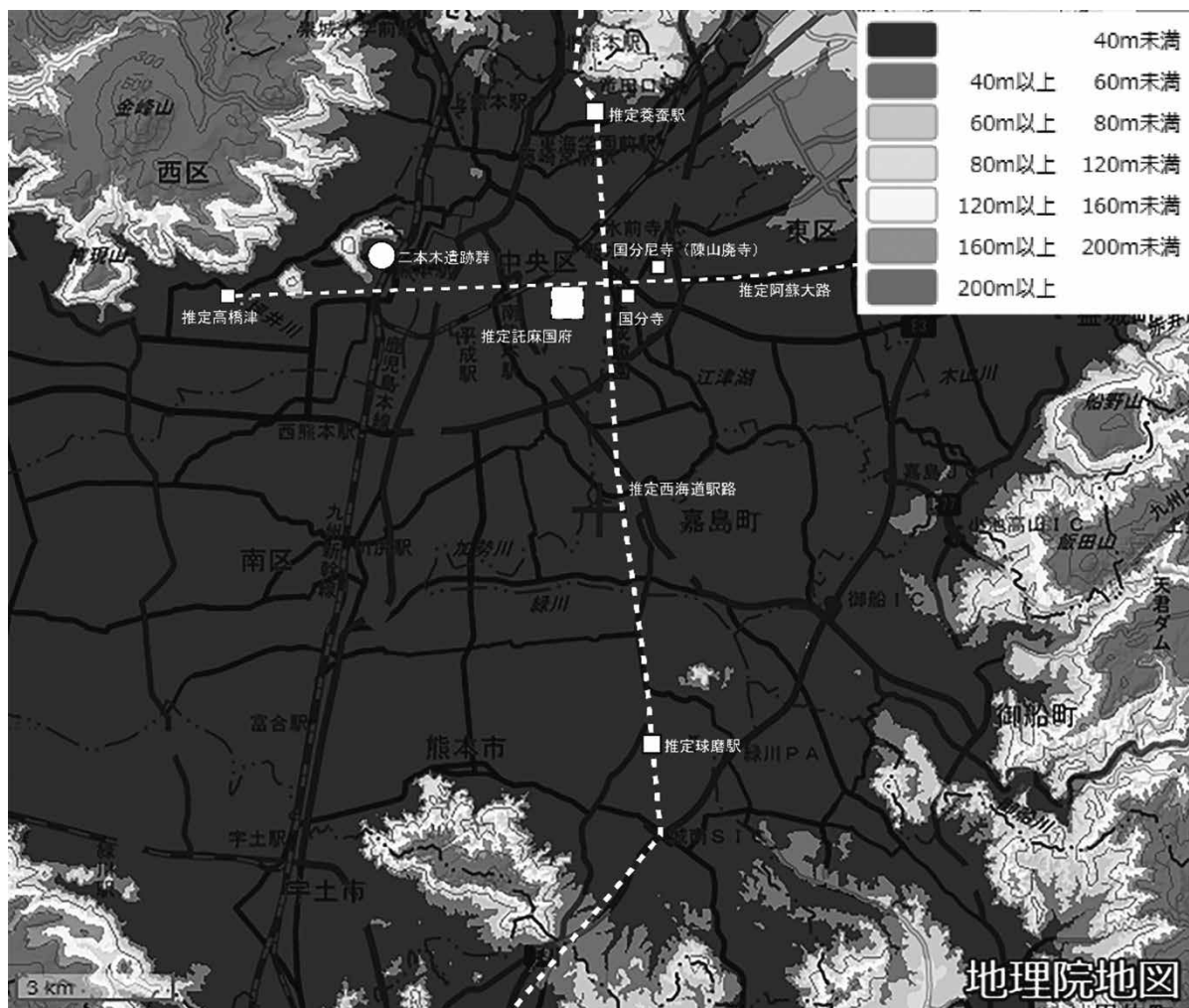
（四）鞠智城

鞠智城は山鹿市菊鹿町米原・木野から菊池市木野にかけて所在する古代山城である。標高一四五メートル前後の通称「米原大地」を中心立地し、南には菊池川流域の肥沃な菊鹿盆地が広がる。鞠智

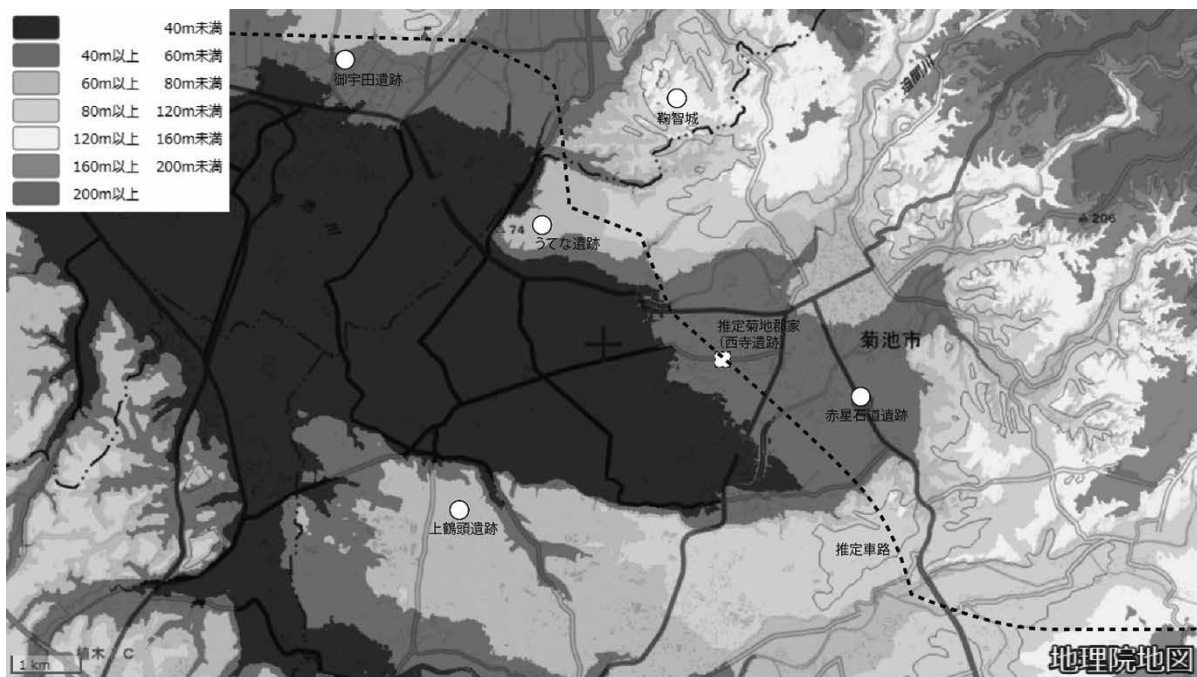
城は『続日本紀』文武天皇二年（六九八年）五月二十五日条「令大宰府繕治大野。基肄。鞠智三城。」に記された「鞠智」とされ、天智天皇二年（六三三年）八月二十八日条にみえる、白村江の戦いの敗戦後、唐・新羅の侵攻に備えて築城された城跡の一つとされる。

鞠智城は前述したように、白村江の戦い後の侵攻に備えた山城と考えられているが、遺物や遺構から推測する存続期間は、十世紀までである。その間ずっと侵攻に備えた機能として稼働していたわけではなく、平安時代頃には備蓄庫のような機能が推測されている。これは、遺構が礎石建物となることや『日本文徳天皇実録』天安二年（八五八年）六月条にみえる「菊地城院の兵庫自ら鳴る、不動倉十一棟が火災にあう」と記載されていることから推測されている。文献史、考古学的視点からみて、平安時代前半期に倉庫のような建物があつたことは確実であり、今後はその機能や管理体制の問題が指摘されるようになった。文献史視点の研究では、「大宰府↓肥後国↓菊池郡」といった重層的な管理体制が提唱されている（註一）。

今回は、鞠智城が備蓄庫のような機能を持った時代の三十六号・五十六号礎石建物出土遺物をカウントした。しかし、鞠智城出土遺物には良好な遺構一括出土はない。したがって、調査時に該当礎石建物周辺として取り上げた遺物のうち、明らかに平安時代前半期とは異なるもの（弥生土器や中近世陶磁器、かえりのついた須恵器蓋）を除き、かつ型式分類に当てはめることの出来る遺物のみをカウントした。鞠智城と比較する遺跡・遺構と比べ、資料の一括性は低く、今後の調査の進展次第では大きく結果が異なる可能性がある。



第4図 二本木遺跡群と熊本平野部の古代遺跡（国土地理院地図を加工し作製）



第5図 鞠智城と周辺の古代遺跡（国土地理院地図を加工し作製）

分析結果

(一) 二本木遺跡群第九七次 A 一〇〇〇八

カウントの結果、型式の識別可能な破片総数は二八七点であった(表2)。土師器と須恵器では土師器の方が多く、その比率は約7:3である。最も多く出土しているものは土師器坏A2で、次いで土師器甕、須恵器坏Bとなる。概観すると、供膳具では皿の比率は坏と比べて低く、二本木遺跡群内でも生活域とあつて甕や壺といった調理具、貯蔵具もある一定数みられる。また、この表には反映されていないが、この遺構からは鉄鉢形黒色土器が出土しており、二本木遺跡群居住域における仏教の浸透を垣間見ることができる。

土師器における回転ヘラミガキ調整のあるものは、坏A2(六八点、七〇・一%)、坏B(三点、一〇〇%)、坏B2(一点、五〇%)、皿A(五点、三三・三%)であり、土師器供膳具における回転ヘラミガキ調整率は比較的高い。

第2表 二本木 97 次 A10008 カウント表

種類	型式	破片数	全体に対する割合	回転ヘラミガキ数
土師器	坏A1	4	1.4%	
	坏A2	97	33.8%	68
	坏A3	0	0.0%	
	坏B	3	1.0%	3
	坏B2	2	0.7%	1
	皿A	15	5.2%	5
	皿B	0	0.0%	
	甕	65	22.6%	
	壺	2	0.7%	
	鉢	1	0.3%	
	鍋	2	0.7%	
	高坏	4	1.4%	
須恵器	坏A	3	1.0%	
	坏B	27	9.4%	
	坏蓋	12	4.2%	
	皿A	5	1.7%	
	皿B	0	0.0%	
	甕	20	7.0%	
	壺	11	3.8%	
	鉢	1	0.3%	
	高坏	7	2.4%	
	枅	1	0.3%	
計		287	100.0%	

(二) 二本木遺跡群第十三次 A 九号

カウントの結果、型式の識別可能な破片総数は一四一点であった(表3)。この遺構においても、須恵器より土師器の方が多く、その比率は概ね7:3である。最も多く出土しているものは土師器坏A2で、次いで土師器皿A、須恵器坏蓋と続く。その出土数にはほとんど差はなく、それぞれ全体の二〇%程度を占める。すなわちその三型式の土器で全体の六〇%近くを占める。また、表には反映していないが、この遺構からは手持ち成形の坏A類、坏B2類、皿A類が出土している。平城京や平安京といった都でみられるものと類似しており、官衙域と呼ぶにふさわしい遺物と思われる。

土師器における回転ヘラミガキ調整のあるものは、坏A2(二三点、七九・三%)、坏B(二点、二〇%)、皿A(二三点、四八・一%)、皿B(二点、一〇〇%)、高坏(二点、二八・六%)、坏蓋(二点、二〇%)であり、供膳具の回転ヘラミガキ調整率は比較的高い。

第3表 二本木 13 次 A9 号溝カウント表

種類	型式	破片数	全体に対する割合	回転ヘラミガキ数
土師器	坏A1	2	1.4%	
	坏A2	29	20.6%	23
	坏A3	0	0.0%	0
	坏B	10	7.1%	2
	坏B2		0.0%	
	皿A	27	19.1%	13
	皿B	1	0.7%	1
	甕	16	11.3%	
	壺		0.0%	
	鉢		0.0%	
	鍋		0.0%	
	高坏	7	5.0%	2
	坏蓋	5	3.5%	1
須恵器	坏A	3	2.1%	
	坏B	9	6.4%	
	坏蓋	24	17.0%	
	皿A		0.0%	
	皿B		0.0%	
	甕	7	5.0%	
	壺	1	0.7%	
	鉢		0.0%	
	高坏		0.0%	
	枅		0.0%	
計		141	100.0%	

(三) 二本木遺跡群第四〇次F区SE〇四

カウンットの結果、型式の識別可能な破片総数は一四五点であった(表4)。この遺構においても、須恵器より土師器の方が多く、その比率は概ね7・3である。最も多く出土しているものは土師器坏A2で、次いで土師器皿A、須恵器甕と続く。しかし、ここでは破片数カウントしているため、必ずしも須恵器甕の個体数が多いとはいえない。基本的には坏や皿といった供膳具が中心であるものと考えられる。また、須恵器鉢の一つは鉄鉢形をしており、ここでも仏教が二本木遺跡群に浸透していることを読み取れる。

土師器における回転ヘラミガキ調整のあるものは、坏A2(九点、二九%)、坏B(三点、四二・九%)、皿A(七点、二八・一%)、高坏(一点、一〇〇%)、坏蓋(一点、一四・三%)であり、供膳具の回転ヘラミガキ調整率は今まで比較してきた資料の中では低い方といえる。

第4表 二本木40次FSE04 カウント表

種類	型式	破片数	全体に対する割合	回転ヘラミガキ数
土師器	坏A1		0.0%	
	坏A2	31	21.4%	9
	坏A3		0.0%	
	坏B	7	4.8%	3
	坏B2	1	0.7%	
	皿A	25	17.2%	7
	皿B		0.0%	
	甕	15	10.3%	
	壺	3	2.1%	
	鉢	3	2.1%	
	鍋		0.0%	
	高坏	1	0.7%	1
須恵器	坏蓋	7	4.8%	1
	甕	2	1.4%	
	坏A	2	1.4%	
	坏B	10	6.9%	
	坏蓋	7	4.8%	
	皿A	1	0.7%	
	皿B		0.0%	
	甕	20	13.8%	
	壺	6	4.1%	
	鉢	3	2.1%	
	高坏	1	0.7%	
	柘		0.0%	
計		145	100.0%	

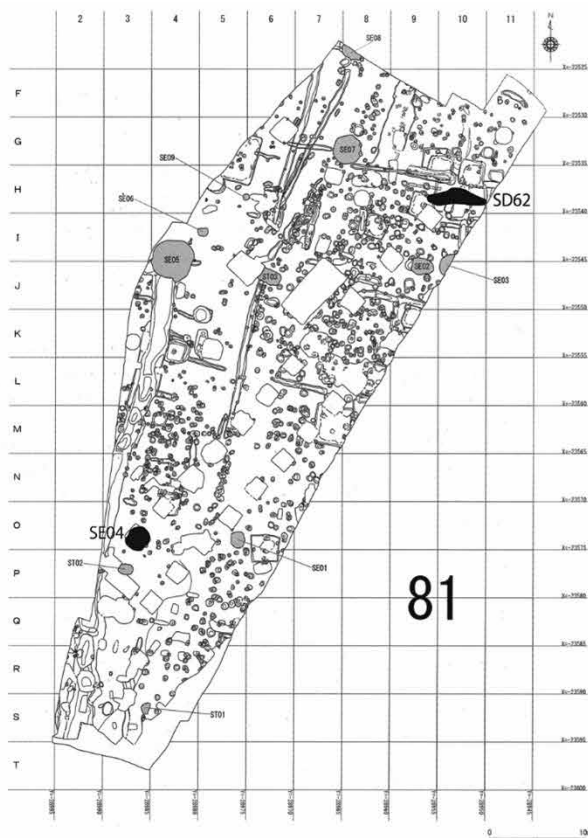
(四) 二本木遺跡群第四〇次F区SD六二

カウンットの結果、型式の識別可能な破片総数は一九五点であった(表5)。この遺構においては、土師器より須恵器の方が多く、その比率は概ね5・5である。これは須恵器甕の破片数が多いことに起因するものと思われる。最も多く出土しているものは土師器皿A、次いで須恵器坏蓋、須恵器甕と続く。須恵器の比率が高いのは、層位を無視し、遺構出土の遺物を全て実見して得た数値であること、溝という遺構の性質上、古い時期の遺物も含まれる可能性が大いにあることからなつたものと思われ、データとしてはやや怪しい部分もある。しかし、大きくは「二本木VI・VII」の間であり、今回の比較には適用できると考えた。

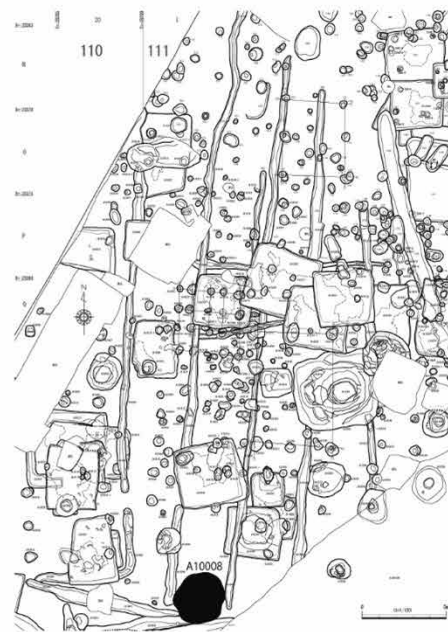
なお、回転ヘラミガキ調整のあるものは、坏A2(九点、四七・四%)、皿A(六点、一九・四%)、坏蓋(一点、七・一%)であり、供膳具の回転ヘラミガキ調整率は、今までのものと比べて低い。

第5表 二本木40次FSD62 カウント表

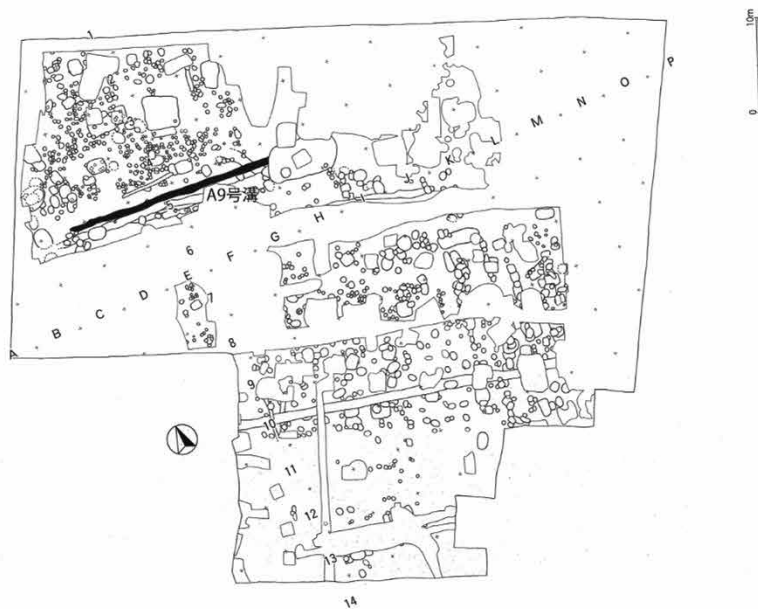
種類	型式	破片数	全体に対する割合	回転ヘラミガキ数
土師器	坏A1	1	0.5%	
	坏A2	19	9.7%	9
	坏A3		0.0%	
	坏B	4	2.1%	
	坏B2	6	3.1%	
	皿A	31	15.9%	6
	皿B		0.0%	
	甕	15	7.7%	
	壺	1	0.5%	
	鉢	2	1.0%	
	鍋		0.0%	
	高坏	4	2.1%	
	坏蓋	14	7.2%	1
	甕		0.0%	
須恵器	坏A	1	0.5%	
	坏B	21	10.8%	
	坏蓋	28	14.4%	
	皿A	2	1.0%	
	皿B		0.0%	
	甕	26	13.3%	
	壺	15	7.7%	
	鉢	4	2.1%	
	高坏	1	0.5%	
	柘		0.0%	
計		195	100.0%	



二本木遺跡群第40次F区調査



二本木遺跡群第97次調査



二本木遺跡群第13次調査

第6図 二本木遺跡群分析対象遺構図（縮尺任意、黒塗りが対象遺構）

(五) 赤星石道遺跡SK〇一

カウントの結果、型式の識別可能な破片総数は八六点であった(表6)。この遺構においては、須恵器より土師器の方が多く、その比率は概ね8・2である。最も多く出土しているものは土師器坏Bであり、次いで土師器坏A2、土師器皿Aと続く。この遺構では、調理具である土師器甕は少量であり、土師器は坏や皿といった供膳具主体である。須恵器には甕や壺が少量確認できるものの、数は少ない。その中においても、須恵器壺には頸部より上位を打ち欠いたような状態で出土しているものもあり、報告書では「祭祀・儀礼行為後に廃棄された土坑」とされている。なお、カウントには含まれていないが、手持ち成形の土師器碗(奈文研分類の碗A類の模倣か)が出土している。

また、この遺構からは回転ヘラミガキ調整のある土師器が見つかった点は大きな特徴といえる。

第6表 赤星石道遺跡SK01 カウント表

種類	型式	破片数	全体に対する割合	回転ヘラミガキ数
土師器	坏A 1	0	0.0%	
	坏A 2	17	19.8%	
	坏A3	0	0.0%	
	坏B	26	30.2%	
	坏B 2	4	4.7%	
	皿A	15	17.4%	
	皿B	4	4.7%	
	甕	6	7.0%	
	壺	0	0.0%	
	鉢	0	0.0%	
	鍋	0	0.0%	
	高坏	0	0.0%	
	坏蓋	0	0.0%	
須恵器	甕	0	0.0%	
	坏A	2	2.3%	
	坏B	3	3.5%	
	坏蓋	1	1.2%	
	皿A		0.0%	
	皿B		0.0%	
	甕	2	2.3%	
	壺	5	5.8%	
	鉢	1	1.2%	
	高坏		0.0%	
	枅		0.0%	
計		86	100.0%	

(六) 赤星石道遺跡SK〇二

カウントの結果、型式の識別可能な破片総数は一二四点であった(表7)。この遺構においては、須恵器より土師器の方が多く、その比率は概ね8・2である。最も多く出土しているものは土師器坏Bであり、次いで土師器坏A2、土師器皿Aと続く。この遺構でも調理具である土師器甕が少量見つかった。また、土師器耳皿や緑釉陶器碗、手持ち成形の土師器皿が出土しており、先ほどのSK〇一同様、報告書では「祭祀・儀礼行為後に廃棄された土坑」とされている。手持ち成形の土師器や耳皿は、熊本県内では一般的に見かける遺物ではなく、報告書で推測されている「郷」の根拠の一つともいえる遺物であろう。

また、この遺構からも回転ヘラミガキ調整のある土師器が見つかった点は大きな特徴といえる。つまり、実見した範囲では、赤星石道遺跡内に回転ヘラミガキ調整土師器はないことになる。

第7表 赤星石道遺跡SK02 カウント表

種類	型式	破片数	全体に対する割合	回転ヘラミガキ数
土師器	坏A 1		0.0%	
	坏A 2	30	24.2%	
	坏A3		0.0%	
	坏B	43	34.7%	
	坏B 2	1	0.8%	
	皿A	20	16.1%	
	皿B	7	5.6%	
	甕	3	2.4%	
	壺		0.0%	
	鉢	1	0.8%	
	鍋		0.0%	
	高坏		0.0%	
	坏蓋		0.0%	
須恵器	甕		0.0%	
	坏A	2	1.6%	
	坏B	3	2.4%	
	坏蓋	1	0.8%	
	皿A	2	1.6%	
	皿B		0.0%	
	甕	7	5.6%	
	壺	3	2.4%	
	鉢	1	0.8%	
	高坏		0.0%	
	枅		0.0%	
計		124	100.0%	

(七) 上鶴頭遺跡

カウントの結果、型式の識別可能な破片総数は一五八点であった(表8)。この遺構においては、須恵器より土師器の方が多く、その比率は概ね9…1である。最も多く出土しているものは土師器坏A2であり、全体出土数の半数以上を占める。次いで土師器皿A、土師器坏B2、土師器皿Bと続く。筆者が実見した限りでは、いわゆる調理具である土師器甕や甑等は確認できていない。一方、須恵器は少量ではあるが、壺や甕といった貯蔵具が確認できる。しかし、土師器と須恵器は今回比較した中で一番差が大きい。上鶴頭遺跡に限っては、遺物総数が少ないこと、出土遺物に大きく時期差が見いだせないことから、調査で出土した遺物全てを実見したが、時期は「二本木Ⅶ」の範疇と思われる。

また、この遺跡からも回転ヘラミガキ調整のある土師器は見つかった。いない。

第8表 上鶴頭遺跡カウント表

種類	型式	破片数	全体に対する割合	回転ヘラミガキ数
土師器	坏A 1	1	0.6%	
	坏A 2	86	54.4%	
	坏A3		0.0%	
	坏B	9	5.7%	
	坏B 2	10	6.3%	
	皿A	20	12.7%	
	皿B	10	6.3%	
	甕		0.0%	
	壺		0.0%	
	鉢		0.0%	
	鍋		0.0%	
	高坏		0.0%	
	坏蓋		0.0%	
須恵器	坏A	3	1.9%	
	坏B	4	2.5%	
	坏蓋		0.0%	
	皿A		0.0%	
	皿B		0.0%	
	甕	8	5.1%	
	壺	7	4.4%	
	鉢		0.0%	
	高坏		0.0%	
	枅		0.0%	
計		158	100.0%	

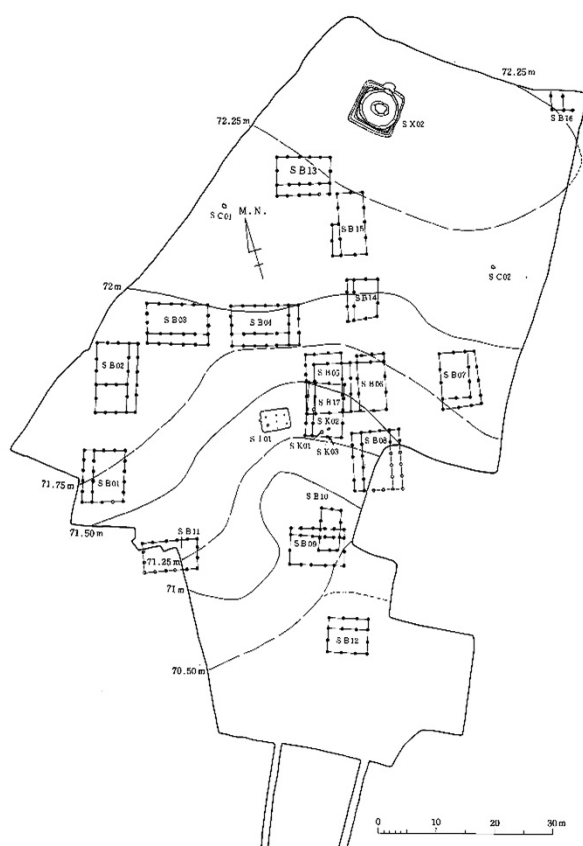
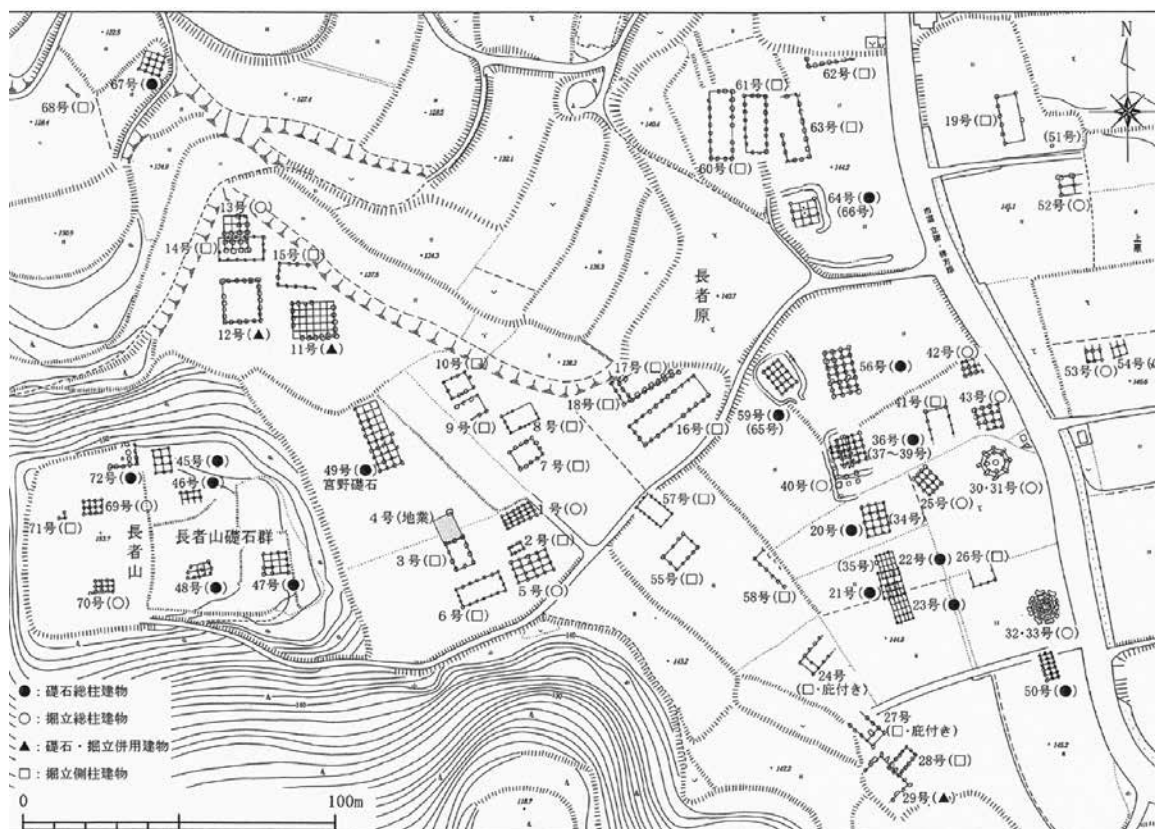
(八) 鞠智城跡三六号建物

カウントの結果、型式の識別可能な破片総数は五七点であった(表9)。今回、カウントしたものの中では一番破片数が少ない。この遺構においては、須恵器より土師器の方が多く、その比率は概ね8…2である。最も多く出土しているものは土師器坏B2であり、次いで土師器坏A2、土師器皿Aと続く。筆者が実見した限りでは、いわゆる調理具である土師器甕や甑等は確認できていない。前述したように、鞠智城遺構出土遺物には、一括性の高い良好な資料は存在しない。三六号建物に関しても、礎石建物であり、礎石の周囲(整地層等)から出土した遺物で、遺構の想定時期に存在してもおかしくない型式の遺物をカウントしている。今回、カウントした遺物からは、当該遺構の時期は「二本木Ⅵ～Ⅶ」の範疇と思われる。

また、この遺構からも回転ヘラミガキ調整のある土師器は見つかった。いない。

第9表 鞠智城跡三六号建物カウント表

種類	型式	破片数	全体に対する割合	回転ヘラミガキ数
土師器	坏A 1		0.0%	
	坏A 2	13	22.8%	
	坏A3		0.0%	
	坏B	21	36.8%	
	坏B 2	3	5.3%	
	皿A	7	12.3%	
	皿B	1	1.8%	
	甕		0.0%	
	壺		0.0%	
	鉢		0.0%	
	鍋		0.0%	
	高坏		0.0%	
	坏蓋		0.0%	
須恵器	坏A		0.0%	
	坏B	1	1.8%	
	坏蓋	6	10.5%	
	皿A		0.0%	
	皿B		0.0%	
	甕	3	5.3%	
	壺		0.0%	
	鉢	2	3.5%	
	高坏		0.0%	
	枅		0.0%	
計		57	100.0%	



第8図 鞠智城・上鶴頭遺跡遺構配置図（縮尺任意、上が鞠智城、下が上鶴頭遺跡）

(九) 鞠智城跡五六号建物

カウントの結果、型式の識別可能な破片総数は七五点であった(表10)。この遺構においては、須恵器より土師器の方が多く、その比率は概ね8:2である。最も多く出土しているものは土師器坏B2であり、次いで土師器皿A、土師器坏A2、土師器坏B2、須恵器甕と続く。筆者が実見した限りでは、この遺構も三六号建物と同じく礎石建物であり、礎石の周囲(整地層等)から出土した遺物で、遺構の想定時期に存在してもおかしくない型式の遺物をカウントしている。今回、カウントした遺物からは、時期は「二本木VI~VII」の範疇と思われる、土師器坏B2の比率が三六号建物よりやや高いことから、三六号建物よりやや新しく位置付けることも可能と思われる。

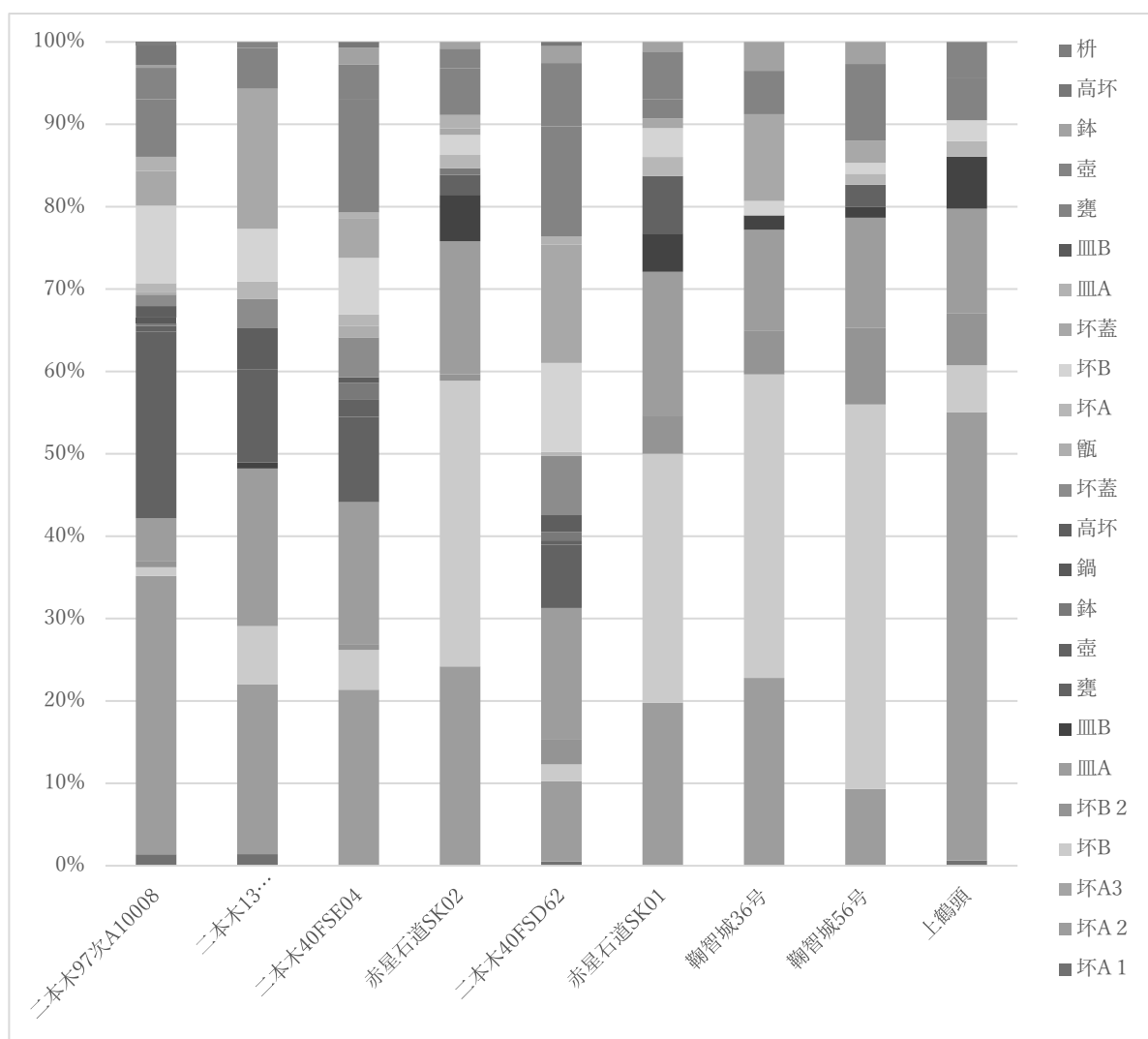
また、この遺構からも回転ヘラミガキ調整のある土師器は見つかった。いない。

第10表 鞠智城跡五六号建物カウント表

種類	型式	破片数	全体に対する割合	回転ヘラミガキ数
土師器	坏A1		0.0%	
	坏A2	7	9.3%	
	坏A3		0.0%	
	坏B	35	46.7%	
	坏B2	7	9.3%	
	皿A	10	13.3%	
	皿B	1	1.3%	
	甕	2	2.7%	
	壺		0.0%	
	鉢		0.0%	
	鍋		0.0%	
	高坏		0.0%	
須恵器	坏A	1	1.3%	
	坏B	1	1.3%	
	坏蓋	2	2.7%	
	皿A		0.0%	
	皿B		0.0%	
	甕	7	9.3%	
	壺		0.0%	
	鉢	2	2.7%	
	高坏		0.0%	
	柘		0.0%	
計		75	100.0%	

以上のように、各遺構、遺跡の出土遺物を型式別にカウントした。各遺構、遺跡の出土数における型式の割合をまとめたものが図6と表11である。表11は、筆者が提唱した年代観に照らし合わせて、左から古いと思われる順に並べている。また、比較した遺構、遺跡の土師器回転ヘラミガキ調整率をまとめた表が表12である。これらの図、表から読み取れることは、

- ① ほとんどで須恵器より土師器の割合が高いこと
 - ② その中で二本木遺跡群は、比較的出土する須恵器量が多く、また多くの形式(種類)が存在すること
 - ③ 土器組成は全てで土師器供膳具中心であること
 - ④ その中でも、二本木遺跡群、上鶴頭遺跡では土師器坏A2が、鞠智城跡、赤星石道遺跡では土師器坏Bが最も多く出土する
 - ⑤ 鞠智城と上鶴頭遺跡では調理具である土師器甕や甑等の出土は極めて少ないこと
 - ⑥ 回転ヘラミガキ調整土師器は二本木遺跡群以外では確認できなかったこと
 - ⑦ 回転ヘラミガキ調整土師器は時期が下るにつれて、調整を施す型式の幅が広がるものの、坏A2へ施すものは減っていくと思われること
- が挙げられる。これらは大きく分けると、土器組成に関すること(①~⑤)と、回転ヘラミガキ調整土師器に関すること(⑥・⑦)に分けられる。次章ではこの二つを、立地・時期・遺構・その他周囲の遺跡との比較といった観点から考察していく。その際、大宰府との関係性などを念頭に置き、考察を加える。



第9図 遺物出土割合グラフ

第11表 遺物出土割合

種類	型式	二本木97次 A10008	二本木13 A 9号溝	二本木 40FSE04	赤星石道 SK02	二本木 40FSD62	赤星石道 SK01	鞠智城36号	鞠智城56号	上鶴頭
土師器	坏A 1	1.4%	1.4%	0.0%	0.0%	0.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.6%
	坏A 2	33.8%	20.6%	21.4%	24.2%	9.7%	19.8%	22.8%	9.3%	54.4%
	坏A3	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	坏B	1.0%	7.1%	4.8%	34.7%	2.1%	30.2%	36.8%	46.7%	5.7%
	坏B 2	0.7%	0.0%	0.7%	0.8%	3.1%	4.7%	5.3%	9.3%	6.3%
	皿A	5.2%	19.1%	17.2%	16.1%	15.9%	17.4%	12.3%	13.3%	12.7%
	皿B	0.0%	0.7%	0.0%	5.6%	0.0%	4.7%	1.8%	1.3%	6.3%
	甕	22.6%	11.3%	10.3%	2.4%	7.7%	7.0%	0.0%	2.7%	0.0%
	壺	0.7%	0.0%	2.1%	0.0%	0.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	鉢	0.3%	0.0%	2.1%	0.8%	1.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	鍋	0.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	高坏	1.4%	5.0%	0.7%	0.0%	2.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
須恵器	坏蓋	1.4%	3.5%	4.8%	0.0%	7.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	甑	0.3%	0.0%	1.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	坏A	1.0%	2.1%	1.4%	1.6%	0.5%	2.3%	0.0%	1.3%	1.9%
	坏B	9.4%	6.4%	6.9%	2.4%	10.8%	3.5%	1.8%	1.3%	2.5%
	坏蓋	4.2%	17.0%	4.8%	0.8%	14.4%	1.2%	10.5%	2.7%	0.0%
	皿A	1.7%	0.0%	0.7%	1.6%	1.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	皿B	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	壺	7.0%	5.0%	13.8%	5.6%	13.3%	2.3%	5.3%	9.3%	5.1%
	壺	3.8%	0.7%	4.1%	2.4%	7.7%	5.8%	0.0%	0.0%	4.4%
	鉢	0.3%	0.0%	2.1%	0.8%	2.1%	1.2%	3.5%	2.7%	0.0%
	高坏	2.4%	0.0%	0.7%	0.0%	0.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	枴	0.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

第 12 表 回転ヘラミガキ調整土師器割合

	二本木97次 A10008	二本木13 A9号溝	二本木40FSE04	二本木40FSD62	上鶴頭	鞠智城合算	赤星石道SK01	赤星石道SK02
坏A2	70.1%	79.3%	29.0%	47.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
坏A3	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
坏B	100.0%	20.0%	42.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
坏B2	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
皿A	33.3%	48.1%	28.0%	19.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
皿B	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
高坏	0.0%	28.6%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
坏蓋	0.0%	20.0%	14.3%	7.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

考察

(二) 土器組成に関すること

前章でまとめた分析結果と傾向を基に、考察を行っていく。まず、①～⑤は土器組成に関連するものである。

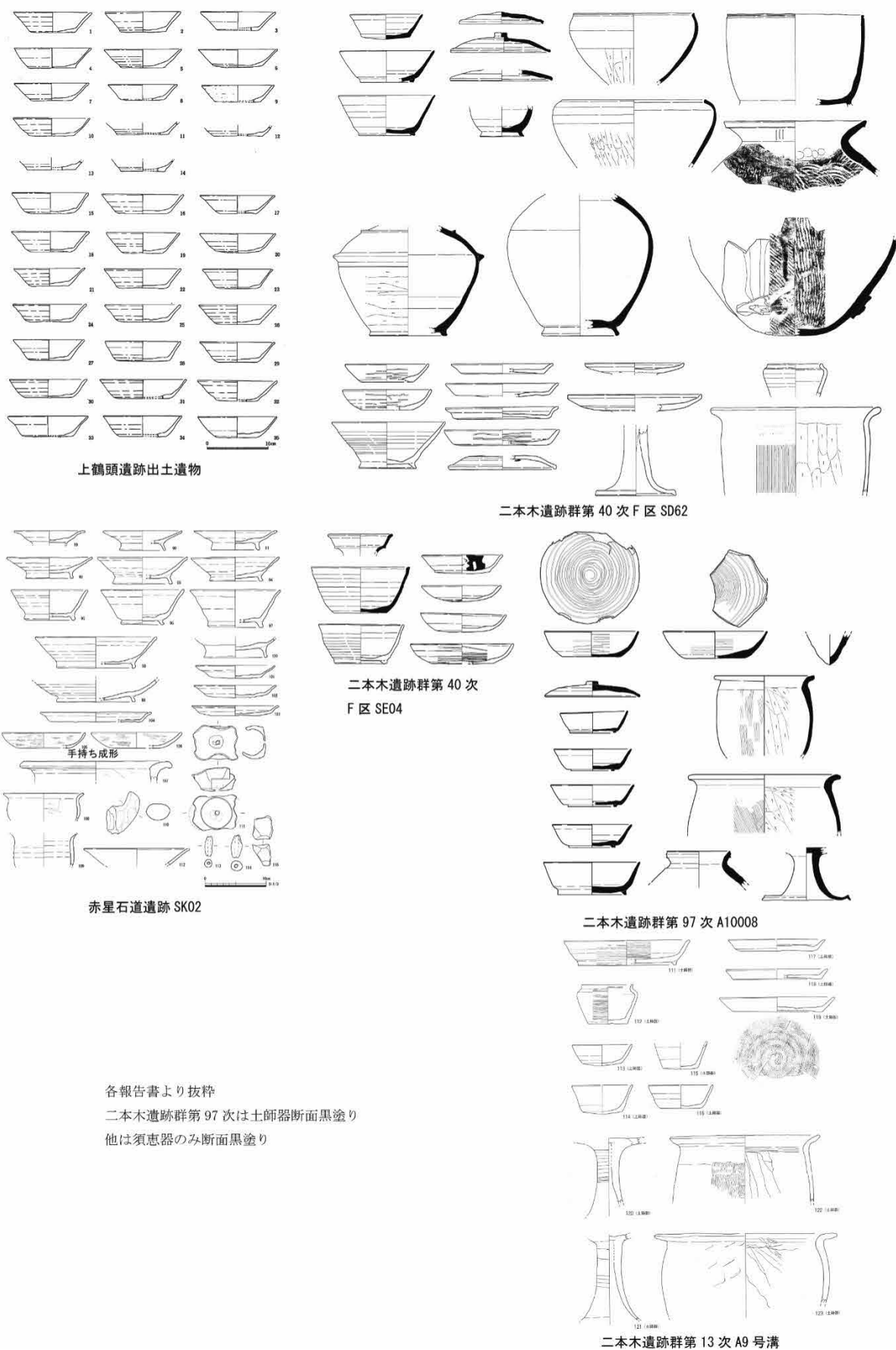
須恵器より土師器の比率が高いという結果は、平安時代になると土師器メインの土器組成になるという従来の研究結果^(註三)を追随するものであろう。また、③の土師器供膳具中心という結果も、根本は同じであるものと思われる。

次に、②の二本木遺跡群は比較的出土須恵器の量や形式が多いという結果には、遺跡の立地が関係しているものと考ええる。今回比較した遺跡・遺構は筆者の年代観で「二本木V～VII」の範疇であり、特に「二本木VI」の特徴は荒尾産須恵器供膳具の消失である。今回の結果、肉眼で観察する限りでは、その傾向は二本木遺跡群のみならず、その他の遺跡でも同じ傾向にあるものと思われる。「二本木VI」

以降、須恵器供膳具を供給しているのは主に宇城地域があり、宇城地域は熊本県に中央部、現在の熊本市域より南に位置している。窯から二本木遺跡群までは約二〇キロメートルであるのに対し、今回比較した中で一番距離のある鞠智城跡までは約五七キロメートルである。鞠智城跡から全く宇城産須恵器が出土しないかと言われればそうではないが、この物理的距離が供給の支障と考えることは妥当ではないだろうか。なお、九世紀頃に供膳具の供給を辞めたとされる荒尾地域では、須恵器生産自体は続いており、甕や壺といった貯蔵具の生産を行っている。この荒尾産須恵器貯蔵具は、今回分析した遺跡・遺構ではだいたい確認できた。つまり、二本木遺跡群は、宇城産須恵器供膳具と荒尾産須恵器貯蔵具が多く供給される遺跡であったと思われる、それが須恵器の量・形式の豊富さに現れたものと考えられる。

④の土器組成における主たる型式の違いについて考えていく。割合的には、土師器坏A2が最も多く出土する二本木遺跡群・上鶴頭遺跡と、土師器坏Bが最も多く出土する鞠智城跡・赤星石道遺跡に分けられる。しかし、出土土器の割合を概観してみると、二本木遺跡群は土師器坏B、いわゆる土師器高台付坏は少ないものの、須恵器坏B（須恵器高台付坏）が一定数出土している。これは二本木遺跡群には前述の須恵器供給の優位性があり、坏形態は土師器、高台付坏形態は須恵器と選択を行っている可能性がある。一方、上鶴頭遺跡は高台付坏の出土は土師器・須恵器ともに少なく、土師器坏A2中心、しかもそれで半数を占めるという偏った傾向といえよう。

また、鞠智城跡・赤星石道遺跡は、土師器坏B（高台付坏）が最も多く出土しているが、土師器坏A2の出土も多く、その二つで半

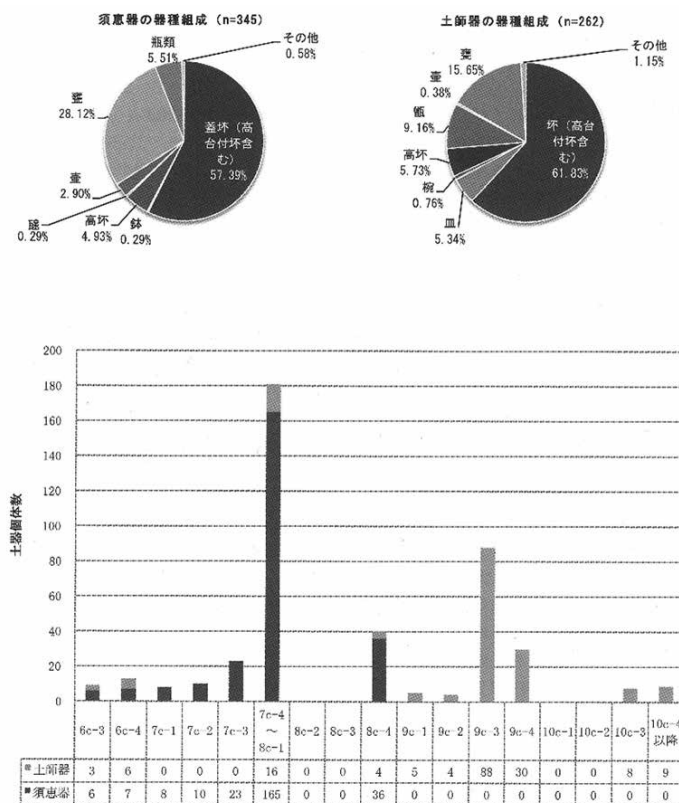


第10図 遺物実測図（縮尺任意、対象遺跡より抜粋）

数程度を占める。このことから、鞠智城跡・赤星石道遺跡は坏形態、高台付坏形態ともに土師器が主ということになり、須恵器と土師器の違いはあるものの、二本木遺跡群と同様に「坏+高台付坏」が出土土器の約半数を占める点では一致している。土師器と須恵器の違いは、前述した供給地との物理的距離が問題しているであろう。

つまり、最も割合の高い形式（型式）のみ抽出した場合、二本木遺跡群と上鶴頭遺跡、鞠智城と赤星石道遺跡に分けられるように見えるが、実際の土器組成の傾向は、「坏+高台付坏」の二本木遺跡群・鞠智城跡・赤星石道遺跡と「坏」の上鶴頭遺跡に分けられるものと思われる。このような結果になった要因についても考察が必要であろうが、現段階では考察に足る根拠が乏しい。しかし、上鶴頭遺跡と二本木遺跡群第四〇次F区SD六二や鞠智城跡五六号建物とはほぼ同時期と考えており、この組成の差は時期差でないであろう。次に⑤について考える。分析の結果、調理具とされる土師器甕や甑が、鞠智城跡や上鶴頭遺跡では極端に少ないことがわかった。上鶴頭遺跡は出土した全ての遺物から確認したため、ほぼ間違いない。鞠智城跡は三六号建物・五六号建物という近接する遺構からの遺物しか確認していないため、今回の結果で鞠智城跡に土師器甕や甑が極端に少ないとは言い難いだろう。現に、鞠智城跡出土土器についてまとめた木村龍生の調査結果では、鞠智城跡出土土師器二六二点の一五・六五%（四一点?）が甕、九・一六%（二三三?）が甑とされている。また、その研究では時期毎の量的分析も行っており、鞠智城跡の七〇八世紀はほぼ須恵器主体で、九世紀になると土師器のみとなっている。おおよその傾向として異論はないが、先ほど述べた二六二点という点数とグラフで示される点数が異なっており、お

そらく、時期特定のしやすい供膳具において主にカウントしたものである。つまり、年代の特定の難しい土師器甕や甑はカウントに入っていない可能性が高く、木村の研究結果に、鞠智城跡から出土の土師器甕や甑が土師器全体の約二五%を占めるからといって、今回の三六号建物・五六号建物からは土師器甕や甑がほとんど出土しないという結果が成り立たないわけではない。むしろ、土師器甕や甑といった調理具は、遺構・遺物ともに多く、人流の多かったと思われる時期の「鞠智城Ⅱ期」のものが多くと考えるのが自然であ



第11図 鞠智城出土土器の傾向（木村 二〇一五より転載）

ろう。しかし、前述したように、今回の分析はごく狭い範囲の遺構出土遺物のみで行っているため、データとしては不十分なところもあり、今後の研究の進展次第では、異なる結果となる場合がある。

仮に調理具が遺跡からほとんど出土しない場合、どのような要因が考えうるだろうか。筆者はこの要因はその場に人が滞在しない、つまり居住空間ではないものと考えている。「鞠智城Ⅳ期」の鞠智城跡は礎石建物主体となっており、備蓄庫のような機能になっていることは先行研究から判明している。『日本文徳天皇実録』には「不動倉」という言葉が出てきており、これは満載になった倉を意味している。不動倉となった時期は不明であるが、『日本文徳天皇実録』にみえる天安二年（八五八年）には不動倉が最低でも十一棟あるということである。不動倉は毎年備蓄をして一杯になったら閉じるというものであるから、鞠智城跡の「鞠智城Ⅳ期」の建物が全て不動倉とは限らない。今回分析した三六号建物は筆者の年代観で「二本木Ⅷ（九世紀中葉）」、五六号建物は「二本木Ⅵ（九世紀前葉）」と考えており、鞠智城にある建物に備蓄していた時期と一致する。では、備蓄を行うために居住空間が必要かといえば、必ずしも必要ではない。熊本では九世紀前半頃まで堅穴住居は存続する^{（註四）}とされているが、鞠智城跡で当該期の堅穴住居跡は確認できておらず、また明確に居住空間と思われる掘立柱建物もない。それに加え、備蓄する生産物（主に稲穀と仮定）は、肥沃な菊鹿盆地で生産されている可能性が高い。これらのことから、鞠智城跡には人の居住はほぼなく、そのため調理具の出土が極端に少ないと仮定することは不可能ではないだろう。一方、同じ理屈で考えた場合、上鶴頭遺跡も人が居住していないこととなる。しかし、上鶴頭遺跡には1軒堅穴

建物が確認されている。また、この堅穴建物は竈を有しており、建物廃絶に伴う竈祭祀かのように、竈には完形の土師器坏が置かれていた。掘立柱建物に囲まれる形で存在しているこの遺構は住居というより炊事場と考えることもできるだろう。出土遺物から、周囲の掘立柱建物と同時期と考えられ、上鶴頭遺跡は堅穴建物利用者、掘立柱建物利用者ともに同時期にいなくなり、廃絶されたことを示している。また、竈祭祀が行われることや、一気に遺跡が廃絶したことを考えれば、どこかに移動した可能性は高い。そのため、供膳具より耐久性の高い土師器甕や甑といった調理具は持ち出された可能性を指摘したい。つまり、鞠智城跡と上鶴頭遺跡において、調理具が極端に少ないといっても、その要因は異なる部分にあると推測される。

（二）回転ヘラミガキ調整土師器

前章でまとめや⑥・⑦は回転ヘラミガキ調整土師器に関するものである。⑥は、二本木遺跡群以外では回転ヘラミガキ調整土師器は出土しない結果となっている。また、⑦は、時期が下ると調整を施す割合は減っていくものの、皿や高坏といった別形式（型式）にも施すようになるといった結果であった。

⑥についてであるが、上鶴頭遺跡に関しては出土遺物全てを実見しているが、鞠智城跡・赤星石道遺跡はそうではなく、一部の遺構の遺物しか実見していない。そのため、今回の結果＝遺跡全体の評価とは言い難い。実際に、鞠智城跡ではⅢ区とされる場所で回転ヘラミガキ調整土師器が出土している。報告書では盤と報告されているが、体部下半には回転ナデによる調整がみられることから、坏A2の特徴も有している。また、赤星石道遺跡の近隣にあり、同一遺

跡（集落）ともいわれる赤星福土・水溜遺跡からも回転ヘラミガキ調整土師器が出土している。それ以外の遺跡では、菊池市万太郎遺跡や熊本市硯川遺跡群・山頭遺跡等でも回転ヘラミガキ調整土師器は出土しており、熊本市域から県北部にかけてはわりと出土する傾向にある。このことから、周囲の遺跡の状況を考慮すれば、回転ヘラミガキ調整土師器は上鶴頭遺跡以外では出土すると考えてよさそうである。しかし、その割合は二本木遺跡群と比べてかなり低く、そこには差を見出せそうである。なお、回転ヘラミガキ調整土師器

は熊本県内、特に熊本市域から県北部域にかけてそれなりに出土する土器群であり、熊本に特徴の土器とする見方がある。しかし、回転ヘラミガキ土師器（大宰府分類・坏d）の性格をまとめた中島恒次郎は、非常に官的な色彩が強く、平城分類碗A類の模倣、つまり佐波理碗の模倣と説明している（中島 一九九二）。また、豊前・豊後の集落と遺物様相について言及した長直信は、官衙関連特有遺跡の特徴の一つとして大宰府分類坏dの出土を挙げている（長二〇一六）。筆者の知っている限り、回転ヘラミガキ調整土師器の出土は筑前・筑後・豊前・豊後・肥前・肥後とかなり広域であり、数点ではあるが長岡京域でも確認される。これらのことから、特に北部九州では共通の意識を持ったうえで、生産・使用されていたものと思われ、太宰府が管轄する西海道を特徴づける土器群といえよう。この土器群がなぜ熊本で多く出土するのか、また、大宰府周辺では八世紀後葉に坏dの出土時期がおおよそ限られるのに対し、熊本では九世紀中葉までと回転ヘラミガキ調整は存続するのか等不明な点もあるが、大宰府坏dの性格やその分布域から、官的色彩の強い土器群とみなすことは不自然ではないものと思われ、その出土量

が多いほど、官的、言い換えるならば、大宰府的とも言えるだろう。

（三）土器様相と遺跡様相

今までのことを踏まえ、今回の最終目的である土器様相から遺跡の様相の検討、及び鞠智城の管理が大宰府か肥後国かを考えていきたい。

まず、今回分析した情報から、各遺跡の想定される土器様相をまとめたものが第13表である。供膳具におけるセット関係の違ひは須恵器供給の優位性の差と考え、調理具の量は、実際に居住域であったどうかを示すものとし、回転ヘラミガキ調整土師器の量は、官的色彩の強弱を現すものと考えた。また、その他にも特殊遺物が出土している場合は記載しているが、二本木遺跡群では輸入陶磁器や非回転台成形土師器、緑釉陶器等が出土する。赤星石道遺跡でも非回転台成形土師器や緑釉陶器、耳皿が出土する。以上の特徴から、二本木遺跡群は特に官の様相の強いことがわかる。土器から遺跡の性格を検討した中島恒次郎は、喜界島など南

第 13 表 各遺跡土器様相まとめ

	供膳具	調理具	回転ヘラミガキ調整土師器	その他特殊遺物
鞠智城跡	「土師器坏+土師器高台付坏」	少	少	無
二本木遺跡群	「土師器坏+須恵器高台付坏」	多	多	非回転台成形土師器・緑釉陶器・輸入陶磁器・猿投産須恵器など
赤星石道遺跡	「土師器坏+土師器高台付坏」	普通？	少	非回転台成形土師器・緑釉陶器・耳皿
上鶴頭遺跡	「土師器坏」	無？	無	無

宰府・（肥後国・）菊池郡・鞠智城」との意見が多くみられるが、土器様相のみでいえば、鞠智城跡出土土器は在地的様相の強い土器群であり、大宰府及び肥後国との直接的関連性は見いだせない。赤星石道遺跡と鞠智城跡は供膳具の組成が近いことから、それを菊池郡的土器様相と捉えることも可能であるが、比較データが少ないため現段階での断言は控えたい。しかし、仮に「土師器坏＋土師器高台付坏」という供膳具組成が、菊池郡的土器様相である場合、赤星石道遺跡に住んでいた人々が鞠智城まで稲穀を運んでいたとの仮定はできる。つまり、実質的な鞠智城の管理は地元（菊池郡内の集落か）が担っていた読み取ることもでき、鞠智城の管理に国家（大宰府や肥後国）が直接人・モノを送り込む体制ではなかったといえる。これらのことは文献史の先行研究にあるように、重層的な管理体制を示す結果ともいえ、文献史の研究結果と考古学の研究結果とが一致したといえよう。

今回は土器組成や回転ヘラミガキ調整土師器といった大宰府との関連が見いだせる土器群らを検討し、各遺跡の位置付け及び鞠智城の管理体制に一部踏み込んで言及した。まとまりのない内容となってしまったのは、筆者の実力不足であり、ご指摘、ご批判は多いかもしれない。しかし、熊本県内における平安時代初期の土器と遺跡を関連付けた研究は少なく、今回の研究が今後の進展の一助になれば幸いである。

最後になりましたが、本稿の執筆にあたり下記の皆様からご協力、ご助言を賜りました。文末ではありますが、記して感謝いたします。

（敬称略）

歴史公園鞠智城・温故創生館、熊本県文化財資料室、熊本市文化

財課、増田直人、美濃口雅朗

註

- （一） 里館翔大二〇一九「平安時代の鞠智城周辺の国内情勢」『鞠智城と古代社会』第七号
- （二） （一）と同じ
- （三） 通説的には、平安時代に入ってから、国産陶器や黒色土器などが増え、土器様式の変化が起るとされている。
- （四） 網田 龍生一九九七「肥後における竪穴住居の終焉」『肥後考古』第十号 肥後考古学会

参考文献

- 阿南 亨 二〇一二『万太郎遺跡・森北院ノ馬場・迫畑遺跡』菊池市文化財調査報告第六集 菊池市教育委員会
 - 網田 龍生 一九九七「肥後における竪穴住居の終焉」『肥後考古』第十号 肥後考古学会
 - 井鍋 誉之編 二〇二〇『赤星石道遺跡・赤星灰塚遺跡』熊本県文化財調査報告第三三九集 熊本県教育委員会
 - 浦田 信智編 一九九三『八反田A・B遺跡 八反畑遺跡』西合志町文化財調査報告第三集 西合志町教育委員会
 - 岡田 有矢編 二〇二一『二本木遺跡群二八』熊本市の文化財第九八集 熊本市教育委員会
 - 金田 一精他 二〇〇七『二本木遺跡群Ⅱ』熊本市教育委員会
 - 木村 龍生編 二〇一五『鞠智城出土土器・瓦の生産地推定に関する基礎的研究』熊本県立装飾古墳館分館
- 歴史公園鞠智城・温故創生館

里館 翔大 二〇一九「平安時代の鞠智城周辺の国内情勢」

『鞠智城と古代社会』第七号

長 直信 二〇一六「豊前・豊後の官衙・集落と土器様相」『官衙・集落と土器二・官都・官衙・集落と土器』

第一九回古代官衙・集落研究会報告書

中島 恒次郎 一九九二「都へ行った土器・長岡京右京第一〇二

調査SD一〇二〇一出土資料」『古文化談叢』第二八集

中島 恒次郎 二〇一五「土器から考える遺跡の性格・大宰府・国府・郡衙・集落」第一八回古代官衙・集落研究会報告書

中原 幹彦編 二〇一五『東中原遺跡・山頭遺跡・第1分冊』熊本市の文化財第四四集 熊本市教育委員会

奈良文化財研究所編 二〇〇四『古代の官衙遺跡 II 遺物・遺構編』奈良文化財研究所

西住 欣一郎他 二〇一二『鞠智城II』熊本県教育委員会

能登原 孝道 二〇一四「菊池川中流域の古代集落と鞠智城」『鞠智城II・論考編1』熊本県教育委員会

橋本 康夫他 一九八三『上鶴頭遺跡』熊本県教育委員会

原田 範昭編 二〇一三『二本木遺跡群一八』熊本市の文化財第二七集 熊本市教育委員会

山元 瞭平 二〇一九a「古代宇城窯跡群の基礎的研究 須恵器編年を中心に」『先史学・考古学論究Ⅶ』龍田考古会

山元 瞭平 二〇一九b「九州・肥後地域」『飛鳥時代の土器編年再考』古代土器研究会資料集 古代土器研究会

挿図出典

第1図 …筆者作成

第2図 …筆者作成

第3図 …山元二〇一九bより転載

第4図 …筆者作成

第5図 …筆者作成

第6図 …岡田二〇二二・金田二〇〇四・原田二〇一三より転載

一部加筆

第7図 …井鍋二〇二〇より転載・一部加筆

第8図 …橋本一九八三・西住二〇一二より転載

第9図 …筆者作成

第10図 …井鍋二〇二〇・岡田二〇二二・金田二〇〇四・原田二〇一三・橋本一九八三より転載

第11図 …木村二〇一五より転載

第12図 …中島二〇一五より転載

第13図 …中島二〇一五より転載・一部加筆